新約聖書 ルカによる福音書 13 章 1 節―9 節（新共同訳）

[1]ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らの
いけにえに混ぜたことをイエスに告げた。[2]イエスはお答えになった。「その
ガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも
罪深い者だったからだと思うのか。[3]決してそうではない。言っておくが、あ
なたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。[4]また、シロアムの塔が
倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、
罪深い者だったと思うのか。[5]決してそうではない。言っておくが、あなたが
たも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

[6]そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじく
の木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。[7]そこで、園丁に言
った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つ
けたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』[8]
園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周り
を掘って、肥やしをやってみます。[9]そうすれば、来年は実がなるかもしれま
せん。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「時を待つ」

フランツ・カフカは『変身』などの小説で有名なチェコ出身の作家です。カフカの作品によく描かれるのは、全くわけの分からない理不尽で不条理な状況に翻弄される人々だと言われています。

カフカはこう述べます。「なぜ、人間は血のつまったただの袋ではないのだろうか」。

カフカの言う通りです。人間は血のつまったただの袋ではありません。人間は、物質的な肉体だけではなく、心がある存在です。人間が、血のつまったただの袋であれば、どんなに楽かと思える時もあるでしょう。

私たちは、目には見えない心の領域において傷つき、苦しみ悩む存在です。人間は、肉体の痛みのみならず精神的なことからでも、身悶えするような苦しみ、のたうち回るような苦しみを味わう生き物です。

ですが、他方で人間は、神から与えられた大いなる喜びを知ることができる存在でもあります。人間は、苦しむ心を持つからこそ、その心を至福の喜びで満たすことができるのです。

本日の福音書は、何人かの人がイエスのもとに来て「ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜた」と伝えた場面から始まります（ルカ 13:1）。これは、その地域を支配していたローマの総督ポンティオ・ピラトが行った出来事についてです。神への礼拝のために動物の犠牲をガリラヤ人がささげていた

時に、彼らをピラトが殺し、その血が礼拝のためのいけにえの血に混ぜられたのです。

ユダヤ人にとっては、神聖な礼拝を汚して行われたガリラヤ人の虐殺は、屈辱的で耐え難い出来事でした。また、当時は「人の不幸はその人の罪の結果だ」という考え方がありました。不条理な出来事を説明するために、人々はこう考えました。虐殺という不幸な運命にあった者たちは、特別に罪を犯したがゆえに神の裁きを受けて殺されたのだと。

イエスは、そのような考え方に対して「決してそうではない」と答えます（ルカ 13:3）。イエスはこう言いました。「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」（ルカ 13:3）。「彼ら」に降りかかった災難が自分たちには降りかからない、と考えてはいけないということです。

そしてイエスは、ご自分からもう一つの出来事を挙げて話を続けます。それはエルサレム城内にあるシロアムの池の近くに建っていた塔が倒れ、十八人が犠牲になった出来事でした。これは、先ほどの礼拝中におけるピラトによる虐殺が政治・宗教がらみの人為的な災難であったことに対して、人間の悪意によるものではない自然発生的な災難です。

イエスは、ここで犠牲になった十八人についても「ほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と同じ言葉を繰り返します（ルカ 13:4-5）。それは、あらゆる出来事を自分たちへの呼びかけ、悔い改めの機会として受け取ることを求めていると言えるでしょう。

さらにイエスは、たとえ話をします。そのたとえ話の中で、三年もの間、実のならない いちじくの木を切り倒すように主人から園丁は言われますが、園丁はその木のためにとりなしをします。

園丁は、ぶどう園の管理を行う者ですが、ぶどう園の所有者ではなく、使用人にすぎません。それにもかかわらず園丁は、このいちじくの木のために主人にもう少し待ってくださいと懇願するのです。

「このままにしておいてください」は、原文のギリシア語では罪のゆるしを意味する「アフェシス」という語が使われています。罪とは、神の意志から外れた状態です。いちじくの木は、主人の意志、すなわち実がなってほしい、という神の意志から外れていました。

実のならなかったいちじくの木のために、園丁が主人に直訴した「御主人様、今年もこのままにしておいてください」という言葉は、罪のゆるしのためのとりなしです（ルカ 13:8）。

そしてこの園丁は、いちじくの木への愛をもってこう言います。「木の周りを掘って、肥やしをやってみます」（ルカ 13:8）。

「木の周りを掘って、肥やしをやってみます」という園丁の申し出は、これまで実をならすことがなく、もう切り倒されて滅びに至るしかなかったいちじくにとって、滅びの時が恵みの時に転換されることを意味します。

三年もの間、実をならすことがなかったいちじくの木は、切り倒される危機に瀕しました。しかし、園丁のとりなしによって、切り倒される時が延期されるだけでなく、肥料までもが与えられます。それは、いちじくの木にとって思いもかけなかったことに違いありません。それによって危機の時は、救いに至る時へと大きく変換されるのです。

したがって、ここで生じているのは、単なる危機の回避ではなく、危機的な状況が神の恵みの時へと転換されることを示すものなのです。それによって「今」は恵みの時となります。

その転換は、主人が待ち続けた三年ものあいだ実をならさなかったいちじくの木に対する、園丁の全面的な好意、憐れみによってもたらされます。園丁は主人に、いちじくの木にもう一年の猶予を与えてほしいととりなします。

このいちじくの木のたとえは、毎日を神からの賜物として生きるようにというメッセージを私たちに伝えます。

私たち人間は、人生において、「なぜ、人間は血のつまったただの袋ではないのだろうか」と思いたくなるような苦しみを味わう時があるかもしれません。

しかし、その苦しみ抜いた心が、きっといつか神から与えられる歓喜に満たされることを信じてください。

私たちは、日々悔い改め、どんな時も神の方向を見続けながら、試みの時も喜びの時も共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。
天の神様。あなたは御子を世に遣わし、あわれみを私たちに向けてくださいます。私たちが、この世の出来事に心を開き、あなたがよしとされる方向へと歩んで行くことができますよう、これからもお助けください。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 55 章 1 節―9 節（新共同訳）
[1] 渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め／価を払

うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。[2]なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い／飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば／良いものを食べることができる。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。[3]耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。わたしはあなたたちとともとこしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。[4]見よ／かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし／諸国民の指導者、統治者とした。[5]今、あなたは知らなかった国に呼びかける。あなたを知らなかった国は／あなたのもとに馳せ参じるであろう。あなたの神である主／あなたに輝きを与えられる／イスラエルの聖なる神のゆえに。
[6]主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。[7]神に逆らう者はその道を離れ／悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。
[8]わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり／わたしの道はあなたたちの道と異なると／主は言われる。[9]天が地を高く超えているように／わたしの道は、あなたたちの道を／わたしの思いは／あなたたちの思いを、高く超えている。

新約聖書 コリントの信徒への手紙一 10 章 1 節―13 節（新共同訳）
[1]兄弟たち、次のことはぜひ知っておいてほしい。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、[2]皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、[3]皆、同じ霊的な食物を食べ、[4]皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、自分たちに離れずについて来た霊的な岩からでしたが、この岩こそキリストだったのです。[5]しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました。[6]これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために。[7]彼らの中のある者がしたように、偶像を礼拝してはいけない。「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」と書いてあります。[8]彼らの中のある者がしたように、みだらなことをしないようにしよう。みだらなことをした者は、一日で二万三千人倒れて死にました。[9]また、彼らの中のある者がしたように、キリストを試みないようにしよう。試みた者は、蛇にかまれて滅びました。[10]彼らの中には不平を言う者がいたが、あなたがたはそのように不平を言ってはいけない。不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。[11]これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。[12]だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。[13]あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

教会讃美歌　151 番「ひとの目には」、76 番「恵みの主イェスよ」、256 番「すがたは見えねど」、238 番「いのちのかて」。